

一事が万事

小倉 一純

僕にはそのうち書こうと思っていることが実はたくさんある。

今日、歌手の小椋佳がゲストで、元アリスの谷村新司がホストを務める、NHKのトーク&歌謡番組を観た。内容は想像に難くないだろう。十一年前の再放送である。

小椋佳が番組中、自分を古希^{こき}、七十歳であると紹介した。この時、既に自分の生前葬を済ませていて、後の人生はすべて余生なのだと語った。

かくいう僕も六十代を半分以上終えてしまった。古希も近い。

そのうち、という態度はもう改めた方がいいのかもしれない。

三十四歳で、日本エア・リキードに入社した。中途入社である。

当時は、テイサンという社名だった。かつては帝国酸素という屋号で、戦前の帝国主義時代を生き残ってきた化学会社である。主に

産業ガスを製造している。

鉄鋼から精密機械そして化学と、僕は二度の転職を経験した。

その転職の理由だが、二度とも、僕自身の精神的な行き詰まりであった。そんな転職を繰り返してでも、会社員を続けようという強い意志が、僕の中にはあった。ただ、なぜ自分はそのような信念にも似た気持ちを持っていたのか、その理由を考えたことはなかった。

今振り返ってみると、僕の父親の世代では、結婚して家庭を持ち定年まで勤め上げるというのが、会社員として立派な生き方だった。その子息である僕も、知らぬ間に同じ美学を心中に温めていたのだろう、と思う。

共立講堂のはす向かいに、学士会館という、時代を感じさせる、洋館が建っている。その学士会は、同窓会連合のような組織だ。東大をはじめとする旧帝大の教員や卒業生が会員となる資格を有している。

その洋館でテイサンの当時の社長をよく知

るという人物と待ち合わせた。紹介者は僕の父親であった。社長は、京大卒だ。その縁故でテイサンに採用となった。僕は、北大卒である。

中途入社組にも同期はいた。同じ部署に配属となった大林君である。年齢も近い。実は彼の妻の父親が、テイサンの取締役人事部長である。つまり大林君は、人事部長の娘婿むすめむこという立場だった。

僕らは本社アネックスの営業部で仕事を始めていた。アネックスというのは別館という意味だ。

そこで一年が経った頃、僕は、虎ノ門の本社フロアーに併設された子会社へ出向を命じられた。

トレーディング部門（具体的には古物商）が主体の小さな会社である。業務システムも、本社のものを流用することができず、別途、社外からソフトを購入し、専用の会計システムを構築した。それが、出向先での僕の最初

の仕事だった。

そんな出向先で頑張っても、その後どうなるものでもないと思っていたが、怠けていても仕方がない。元来、馬鹿が付く位、生真面目な僕は、その日も残業して、キーボードを叩いていた。

そこへ、例の人事部長が、若手男子社員を一人引き連れて、僕の座る子会社のエリアへつかつかと入って来た。

さあ、これから一杯やりに行こう、というのである。

ほぼ平社員の僕を重役が直々に誘うからには何か理由でもあるのだろうか。

そういえば、アネックスにいた時に、こんなことを小耳に挟んだことがあった。

本当は子会社への出向は、当初、大林君に白羽の矢が立っていた。それを人事部長がよしとせず待ったをかけた。それで急遽、その白羽の矢は、僕に立て替えられた。

ハッキリと確認したわけではないが、お誘

いの理由は、それ以外には見当たらなかった。
その晩、僕は銀座で四軒の高級店をはしごした。店の選択や注文に関してわがままもいったが、人事部長はそれらをすべて受け入れてくれた。

こちらは、出向先の直属の上司である課長も同伴だった。その四名で数時間、飲食をとみにしたが、子会社出向の件については、ついぞ一言も話題に上ることがなかった。

まことに不思議な晩であった。

別れ際に、タクシー券を渡された。

内心では、いつ肝心な話の口火が切れられるだろうかと思構えていた。

ただし、間違っても自分からこの話題を持ち出そうとは思わなかった。

それは自分にとって敗北を意味するからだ。僕は、それまでの人生でいつもこの調子でハズレばかりを引かされてきた。

僕にとっては、まさに、一事が万事なのであった。